無常

唐木順三

筑摩叢書 39

筑摩叢書　39

無　　常

唐木順三

筑摩書房

唐木順三（からき じゅんぞう）

1904年　長野縣に生まれる
1927年　京都帝國大學文學部哲學科卒業
1980年　死去
著　書　――「鷗外の精神」「三木清」「中世の文學」（讀賣文學賞），「千利休」「無用者の系譜」「朴の木」「中世から近世へ」「新版現代史への試み」など多數。

無　常　　筑摩叢書 39

1965年4月15日　初版第1刷發行
1980年7月30日　初版第21刷發行

著　者　唐木順三
發行者　布川角左衛門
發行所　株式會社 筑摩書房
東京都千代田區神田小川町2の8
電話　東京(291) 7651番(營業)
(294) 6711 (編集)
郵便番號　101―91
振替　東京 6―4123

© 1965

精興社印刷・積信堂

(分類) 1095 (製品) 01039 (出版社) 4604

無常

目次

一　はかなし……五

(一)　序……五
(二)　「はかなし」といふ言葉……一〇
(三)　かげろふの日記……一八
(四)　紫式部日記……四三
(五)　宇治十帖……五七
(六)　和泉式部日記……七二
(七)　兵の登場　I　――あるエピソード――……八五
(八)　兵の登場　II　――非情の世界――……九五
(九)　建禮門院右京大夫集　――「はかなし」から無常へ――……一一一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

二　無　常……一三一
(一)　さまざまな發心　——法然の特殊性——……一三一
(二)　淨土と穢土　——惠心・法然・親鸞——……一四七
(三)　死と詩　——一遍の稱名——……一七六
(四)　雄辯と詠嘆　——そのさまざまないろあひ——……二〇四
(五)　詠嘆的無常觀から自覺的無常觀へ　——徒然草の場合——……二四〇
(六)　飛花落葉　——心敬・宗祇・芭蕉——……二五六
三　無常の形而上學　——道元——……二八三
あとがき……三五一

はかなし

(一) 序

「あはれ」といふ言葉が『源氏物語』に千と四十いくつあると數へた好事家もゐるが、「はかなし」といふ言葉、またその類語も、王朝の女流文藝作品に實に多く使はれてゐる。「あはれ」の意味は本居宣長、その他の學者によつて、ほぼ限定されてゐるが、「はかなし」の方はさらに多義の上に、限定しにくい。むしろその言葉自身が限定されるのを拒否し、嫌つてゐるやうにみえる。強ひて限定すれば、そこに含まれてゐる感情が逃げてしまふやうに思はれる。

卽ちすぐれて心理的、情緒的な言葉といつてよい。しかもこの心理、情緒を味はひえなければ、王朝文藝を味はひつくせないといふ重要な言葉である。

もうひとつ、「はかなし」といふ言葉は、歷史的に、かなり意味內容が變つてきてゐる。言葉の意味が時代とともに變るといふことは、一面では當然のことながら、「はかなし」の場合はすぐれて微妙である。微妙といふのは、單に意味內容の變化だけではなく、その言葉を發する當人の微妙な心理、情緒に關係して變化するからである。しかも、時代の雰圍氣に最も微妙に影響されやすい人間が、好んで「はかなし」といふ言葉を使つてゐるからである。

私はこの言葉の意味內容の歷史的變遷の跡をたどつてみたい。そして結論をさきに書いてしまへば、「はかなし」といふ言葉がふくんでゐる王朝的な心理と情緒が、王朝末から中世にかけて、「無常」に急勾配で傾斜してゆく跡を證してみたいのである。言つてみれば、王朝の宮廷的、女性的な心理や感情では、どうにも始末に負へないやうな事態が現實に出てきて、この事態に對應する言葉を求めながら、急には果しえずに、なほ舊來の「はかなし」に賴つてゐたが、「常ならぬ世」といふ、これも王朝期にかなり多く使はれてゐる言葉、佛敎的色彩をもつた言葉と結びつき、「常ならぬ世」を、自身で、具體的に、實感的に體驗した人々、現實の事

態の當事者としての男性によつて、「無常」といふ言葉が、おのづからに生み出されてきた、と、私はさう思ふ。

「もののあはれ」はすぐれて日本的な言葉である。今日の我々も、この言葉の中にゐる。政治や經濟が、もののあはれから脱出することを計り、イデオロギイや口說や理論や組織に賴つて、一時それで成功してゐるやうに外見では見えながら、なほ奥の方では、「あはれ」の感情から自由ではない。まして文藝においてをやである。私はこれをマイナスとは思はない。「無常」は、「あはれ」にもまして、今日の我々の體内になほ生きてゐる。これもすぐれて日本的な心理、感情に違ひないが、「あはれ」と違つて、「無常」は、今日では世界的な意味をもつ、またもちうる内容があると、私は思ふ。

「無常」については、既に多くの人が書いてゐる。書きすぎるほど書いてゐる。そしてそのために、一種の教科書的概念が出來上つて、通俗化し、その深い内容を見失つてしまつた、と、まづさういへる。今日、この教科書的な概念規定から、「無常」を救ひ出すことが、私に課せられてゐると、私はさう思つて、この兩三年を經ながら、不慮のことにも遇つて果しえなかつた。何故に私がさう思つたかといへば、今日ほど「無常」の事態を眼前にさらけ出してゐる時

は、さうざらにはない。現實の事態が「無常」なのである。言つてしまへば、ニヒリズムが普遍化し、すでにニヒリズムといふ實態が觀念されえないほどに、ニヒリズムそのものが、のさばつてゐる。ニヒリズムはすでに特定人の特定の主義や意見ではない。世界を擧げてニヒリスティックなのである。ひとはそのなかにありながら、それを意識しえない。その現實に、一見は不滿はなささうにみえる。いな、それをこそ新しい時代と思つてゐるやうにさへみえる。然し、根本のところでは、世界を擧げて、このことのために不安である。繁榮し、進歩すればするほど不安である。この繁榮、この進歩が、死への、滅亡へのそれではないかといふ不安は世界の現實である。最もすすんだ科學者、物理學者が、すでにさう考へ、自分たちの生み出した科學の進歩と繁榮に不安を感じてきてゐる。科學者が、みづからの社會的、道德的責任を云々せざるをえなくなつてきたのが今日の現實であるとともに、そこに大きなアナクロニズムがある。學問の、政治や權威からの獨立、科學研究の自由、眞理のための眞理の追求といふ、十七世紀以來の方向によつて進歩の一途をたどつてきた科學が、いまさらに社會的、道德的、さらには政治的責任を自らに課さねばならなくなつた、といふところに、今日の問題がある。然し科學はさらに進歩するだらう。進歩することよりほかに能のないのが科學といふもの、それは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

科學のいはば宿命といつてよい。進歩をやめれば、近代科學の理念も事實もくづれ去つてしまふ。

無常の無、ニヒリズムのニヒルにおいて不安と無根據を感ずるとき、ひとは有常、恒常なるものを求める。絶對的なもの、權威を探す。そしてその絶對的權威に賴つて自己の安定化を計る。さまざまなる意匠がここに出現するわけだが、ひとはそれをさまざまなるものの一つとは考へたくないといふ傾きをもつ。卽ち特殊なるものが絶對化される。有の絶對化といつてよい。國家、民族、階級、家族、特殊社會、さういふものを絶對化することによつての失敗の跡、または失敗の可能性を我々はこの眼で見てきた、また現に見てゐる。かういふ中から、いはゆる主體的自己のみを眞實とする實感主義、實存主義が出てきたのは當然である。然しまた無常、ニヒルの體驗がほかならぬ自己において極まるといふこともまた實感である。自己などといふ實體はどこにもない。

もはや、迂路をたどるべきではない。無常なるものの無常性を、徹底させるよりほかはない。この方面で最も徹底したのは大乘佛教であつた。諸行無常、一切皆空、さういふ言ひふるされて具體的意味を失つてしまつた言葉の意味內容を、いまあらためて考へるべきである。

「はかなし」から「無常」へ、そこはかとなき無常感覺または無常美感から、徹底した無常觀へ、無常こそまさに現實であるといふところへ出たのが『正法眼藏』九十五卷の道元であつた。

私は「はかなし」から始めて、その意味內容の歷史的變遷を究め、それが「無常」に轉入して、無常感覺から更に無常そのものへと進んで究極した、日本的心理、日本・世界的な思索の跡をここに辿らうとする。從來の無常論より、一歩も二歩も、さらには百歩もすすんで考へてみたいといふのが、私のひそかな志である。

(二) 「はかなし」といふ言葉

私に、「はかなし」についての思考の端緒を與へたのは、岩波の日本古典文學大系第二十卷所收の『和泉式部日記』の冒頭、「夢よりもはかなき世のなかを嘆きわびつつ明かし暮らすほどに」云々の補注であつた。それを書いたのは遠藤嘉基氏である。

そこには次のやうに書かれてゐる。

「夢をはかないと言つた例は、古今集を始め多い。この日記にも『はかなき夢をだに見で明かしては』とある。その夢よりもはかなき世のなかである。ここで、はかなきが、『世のなか』の客觀的な屬性を示すと共に、『世のなか』への、言語主體の情意をも示してゐることに注意したい。國語の形容詞とは、さういふものである（時枝誠記『國語學原論』）。語源は『はかどる』『はかがいく』などの『はか』と同じか。」

總じて遠藤氏の注はゆきとどいてゐて立派であるが、ここのところに、私はあつと息をのむ思ひがした。ちなみにいへば、時枝氏の『國語學原論』參照といふのは、同著「文法論」第三章二八七頁以下のところであらう。時枝氏はそこで、「雨は淋しい」といふ表現における、情意性と、雨といふ客觀的なものの屬性との二要素について書き、また「恥し」といふ表現の二側面、卽ち、こちらが恥しいといふ側面と、こちらが恥しくなるくらゐ、むかふが立派だといふ側面とを詳しく書いてゐる。

私は「あはれ」と「はかなし」を並べて考へたとき、「あはれ」の方には、ここにいふ言語主體の情意が勝つてゐるのに對し、後者には、ここにいふ客觀的屬性の方が勝つてゐると、考へてゐた。私は私の言葉で、情緒的要素、存在的要素とその兩者を言つてきたが、ここにおい

て、「はかなし」にも、情緒的要素と存在的要素をまた分けて考へるべきだと思ひ、それへの關心から、王朝女流文藝をあらためて讀みかへしてみた。そして、私の考へに重要な支點を與へたのは、「はかなし」の「はか」が、「はかどる」「はかがいく」の「はか」と語源を同じうするか、といふ、多少の疑義を殘しながらの暗示であつた。

ところでその「はか」とは何であるか。私はまづ辭書に賴つてみた。『大言海』には次のやうに出てゐる。

「はか（計）――稻を植ゑ、又は刈り、或は茅を刈るなどに、其地を分つに云ふ語。田なれば、一面の田を數區に分ち、一はか、二はか、三はかなどと立てて、男女打雜り、一はかより植ゑ始め、又、刈り始めて、二はか、三はか、と終はる。又稻を植ゑたる列と列との間をも云ふ。卽ち、稻株と稻株との間を、一はか、二はかと稱す。（萬葉、十六、天なるやささらの小野に茅草（ちがや）刈り、草刈婆可（かやかりばか）に鶉を立つも）」

さらに『大言海』は「はか」の「量」の意味を載せてゐる。

「はか（量）――量（はかり）の略。田を劃して一はか二はかといふ。農業の進むより一般の事に轉ず。仕事のすすみ。はかどり。――はかがゆく、はかがゆかぬ。」

『廣辭苑』には、「はか（量・捗）――仕事の進む程度。はかどり。功程。――はかが行く。」といふ解が出てゐる。

我々は右の解によつて、「はか」は原初的には、田の區劃、稻株と稻株との間といふやうに、空間に關係した言葉であつたことを知る。そして、やがて、その一區劃を植ゑまた刈るに要する時間に關係してきて、仕事のすすみ、又はすすみ具合といふことになつて、「はかがゆく」とか「はかどり」といふ言葉が出てきたことを知る。仕事のすすむテンポの問題が出てきたのである。

『廣辭苑』の「はかり」の解に次の三つがある。

「はかり（秤）――物の重さを量るに用いる器械の總稱。」

「はかり（計・量）――①はかること。萬葉集、四、ことはかりせよ。②めあて、あてど。伊勢物語、いづこをはかりとも覺えざりければ。」

「はかり――きり。かぎり。際限。源氏、鈴蟲、はかりもなくかしづき給ふ。」

この場合、やはり第三の「きり、かぎり」が原初的で、その「きり」を計量すること、また計量する器械といふ意味を伴つてきたわけであらう。空間的な「きり」を計るに要する時間が

出てきて、「ことはかりせよ」といふやうな意味を伴つてきた。ここから「はかりごと、謀、計事」も出てき、『徒然草』の「人の上をのみはかりて、己を知らざるなり」といふ、「觀察」「推量」の意味も出てくる。「おしはかる、豫測する、企てる、機會をうかがふ、見はからふ」から更に轉じて、「あざむく、だます」といふやうな、さまざまな「はかる」といふ言葉の意味も出てこようといふものである。「ばかり、許、斗」もここから出てくる。「いかばかり戀しくありけん」「今二日ばかりあらば散りなむ」「卯の時ばかり船を出す」といふやうな「ばかり」。さらには、それだけに限定する意味で、たとへば『源氏』桐壺の、「月影ばかりぞ八重葎にもさはらず、さし入りたる」といふ使ひ方も出てくる。

空間を計量し、推測し、豫測する時間のテンポが早くて、正確であることに關して、『廣辭苑』の擧げてゐる「はかばかし、果々し、捗々し」が出てくるであらう。それには次のやうな六つの解が出てゐる。

1、效果のあがるさま。物事がよい方へはかどつてゐる。

2、きはだつてゐる。

3、はきはきしてゐる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com